

# 会報

2002. 6. 20

第 3 2 号

## 戦没船を記録する会

〒105-0014 東京都港区芝2-8-43 睦マンション206  
Tel:03-3452-5085 FAX:03-3452-2711 郵便振替001606-719515

## 目次

第9回定期総会開催	1
会員からの意見・第5期役員	2
商船が語る太平洋戦争=野間恒著	3
戦没船員調査-岐阜県	3
「資料館を支えるグループの運営について」 を公表した杉本勝君へ=二宮順祐	4-5
57年目の遺族訪問	6
知られざる漁船の戦い=新関昌利著	7
おたより	7
便宜置籍船の無法性暴露	8
収支報告・編集後記	8

## 第9回定期総会を開催

活動方針、第5期役員などを決定

戦没船を記録する会の第9回定期総会は、2002年4月20日、東京・浜松町の海員会館に役員・会員など、22人(委任出席61名)が出席して開催された。

総会では理事の川村起氏を議長に選任して議事が進められたが、会長挨拶、第8年度活動報告、決算報告、活動方針の審議、第5期役員選出などが行われた。

(報告、方針は本紙前号参照)

### 質疑討論

資料館の運営資金はどこから出ているか、資料館を支えるグループの問題で、海員組合と合意書を交わした経緯は？

・ 我々は資料館が出来たときから、共同して資料館を作ったのだから、本会に報告があって当然と言ってきたが、組合が責任を持ってやるからという理由で、資料館の収支報告は(来館者のカンパや資料代等も)一切、報告も発表もされていない。

昨年組合大会で、資料館の運営資金250万円を計上、海員福祉センターを通じて資料館(関西地方支部)に支払われていると聞いている。その用途は資料館勤務者の日当が中心のようだ。

・ 資料館の今後の運営について組合は、本会と新たに運営委員会を作るなどは、組織の状態から好ましくないとの態度だったし、関西地方支部は傍からとやかく言われたくないという態度だった。

杉本君は事務局長を投げ出した後、資料館の上沢君と連絡をとって支えるグループを発足させた。今まで事務局長をやっていた2人が、今まで培ってきたノウハウを全部持って行って始めたのだから、運動の上でのダメージは大きい。裏切り行為だという意見もあり、私も分派行動だと思う。支える会のような運動自体は必要であり、真つ向から否定する訳にいかないの海員組合と協議し、組合も記録する会を差し置いて後援に名を連ねたのはまずかったと思ったのか、協力して

「支えるグループの運動を推進する」ことで合意できるなら、「合意書」を取り交わすことになった。



## 川島会長挨拶

本会も発足以来9年度を迎えた。皆さんのすばらしいアイデアと、献身的な手弁当での努力に感動しながら、私も途中から少しでもお役に立てればと会長の役を引き受けたが、皆さんのご協力により素晴らしい成果を上げることが出来た。この間、北は北海道から南は沖縄まで、パネル展を中心に戦没船と戦没船員の実態を訴えてきた。そして一昨年の8月15日には海員組合のご好意により、海員組合関西地方支部に「戦没した船と海員の資料館」を開設することが出来た。平和の発信基地として立派に役割を果たしていくことが期待される。

最近の情勢は厳しい。厳しくしている状況があるが、厳しくしているのは国会議員ではないのかともいえる。有事、有事といいながら十分論議もないまま、何時の間にか平和が脅かされる状況に持つていかれる恐れがある。戦争による船舶被害、船員の犠牲という切り口を通して、平和を守ることに少しでも貢献することが、我々の使命ではないか。そのための真剣な討議をお願いしたい。

## 会員からの意見

総会出欠八ガキから(一部割愛)(敬称略)

\* 反戦という理念に縛られて自衛艦の海外派遣などへの、日本の現実についての判断を誤られないように。

笠原洋

\* 有事法制、人権保護法(?)という名の、マスコミ報道統制法と恐ろしい時代への道を掃き清める法案、阻止しなくては、と想います。横山篤夫

\* 私も高齢者になり年会費6000円は「いたい」。海員組合はどうしたのだろうか、戦没船を記録する会に力をかしてくれたいと想います。

宗教者平和協議会会員 梶山登

\* 会の皆さんご健勝にてお過ごしのことと存じ上げます。私こと本年2月喜寿を越え、米軍ジェット機轟音の下で暮らしています。今後とも宜しく。大谷泰造

\* 3月10日赤旗新聞日曜版で、資料館ボランティアをしている、元事務局で頑張っていた上沢祥昭氏のお父上の最後の記事を読みました。小泉内閣「有事法制-恐ろしい南北朝鮮動乱、ベトナム戦争の米船運航の船員の死亡事故等浮かんできた。悲惨を思いだし、こりゃ大変な時代が身近になって来た思いがしました。

藤川徹司

\* 資料館の維持運営について混乱があったようですが、收拾されて何よりでした。今後も「戦没船を記録し海の平和を守る」ために役員の皆さまご苦労様ですが、活躍を期待しております。中野渡力雄

\* 再度資料館に行きたいと思えます。東洋汽船の本のために。古山勝夫

\* 役員各位ご苦労様です。戦後50年を経て、わが海運界の様相も一変し、6万の犠牲を出した鎮魂の歴史の中で、生存者、遺族とも高齢化し、また亡くなりつつあります。今後平和運動の主唱者の年代は戦争を知らぬ年代へと引き継がれようとする岐路に立っています。今後目的の共通する2つの団体の維持管理費の確保は大変です。会員増加が見込まれないとすれば、何によって資金源を確保するのか不安です。現状これと言って名案は掴めていませんが。東海林久三郎

\* 神戸の資料館の「支える会」が発足し、組織運営をしていく上で事務所は当面、当会か海員組合になるのかと思えますが、将来独立した事務所になるのでしょうか。なるとすれば神戸をお願いしたい。

福山善郎

\* 今回も出席出来なくて申し訳ありません。昨年当地袋井にて戦没船の写真を展示しましたが、会場が狭くて一部しか展示出来なく、残念でした。海事思想の普及の問題にも関連しますが、どうしたら海のすきまじ

い戦争体験を国民に知ってもらえるか、あの戦争の船員と船舶にもたらした惨害を知ったら、有事法制なんてほんとにナンセンスです。平和をどう維持していくか。ともに有事立法反対、憲法9条を守りましょう。会の発展を心から願っています。高橋潤次

\* 在日中国人向け新聞「東方時報」第365号3月28日付=トップは、「"9・11" "衝撃和平憲法日本政界再現"改憲"風潮」と題して、3月22日付読売新聞のあれこれを紹介しており、中国人の見た今日の我が国政憲動向に極めて高い関心を示しています。当会の歴史的教訓を、今こそ声を大にして全国民に訴えていく時だと思っています。総会の成功をご祈念いたします。小田純市

## 第5期役員

(2002年4月20日選出)

会長	川島 裕	国際船長協会連盟名誉会長
副会長	川村 赳	全日本船舶職員協会会長
同	中島 洋	太平洋学会専務理事
理事	青山 昭元	横浜鷗友会
同	伊東 信	作家
同	岸本 勇夫	元船舶通信士労働組合書記長
同	栗原 三郎	船員OB
同	小島 敦夫	海洋ジャーナリスト
同	小島 定吉	現代写真研究所事務局長
同	小林 三郎	海の平和問題懇談会代表
同	河内山典隆	海事ジャーナリスト
同	新藤 博志	前横浜鷗友会会長
同	田中 正吾	元国鉄船舶局次長
同	田中正八郎	元海員福祉センター常務
同	豊田 健造	船員OB
同	中原 厚	元戦没船員遺族会常任理事
同	二宮 淳祐	海員組合名誉組合員
同	正岡 勝直	船舶史研究者
同	三田 和雄	元海員組合資料室長
同	溝邊 修	船員OB 関西支部長兼務
同	南 弘	横浜鷗友会会長
同	矢内丑五郎	船員OB
同	吉田 敏長	元海員組合京浜支部長 横浜支部長兼務
常任理事	篠原 国雄	海上労働ネット事務局長 事務局長兼務
監事	桑島 直矢	船員OB
同	小島 久子	税理士
顧問	笹木 弘	東京商船大学名誉教授
同	田川 俊一	弁護士
同	山田 早苗	船舶史研究者・歯科医

# 商船が語る太平洋戦争

「商船三井戦時船史」刊行さる

「商船が語る太平洋戦争」という本がこの5月に刊行された。この本の扉には「この書を5,731柱のみ霊に捧ぐ」と記されている。

表紙の副題が示すように、同社の戦没船286隻を、第1章緒戦期、第2章中部太平洋角逐期、第3章中部太平洋守勢期、第4章比島防衛と南方資源輸送期、第5章終盤戦期に分け、戦没年月日順に、各船の来歴から戦没の状況までの記録(英文併記)を、本船の写真と、これを攻撃し沈没させた潜水艦や戦闘機の写真とともに記載している。また各船ごとに、戦没船員全員の、職名、氏名、年齢、出身県を記した名簿を載せており、巻頭の大久保 一郎画伯の油絵や多くの関係船舶の写真、巻末の喪失船舶リストなど、600頁を超える大作である。

この本の著者「野間恒」氏は、大阪商船の社員から九州急行フェリーの取締役社長を勤めた方で、子供のころ大阪商船事務長で3回遭難した叔父に話を聞いていること。71年に「日本郵船戦時船史」を手にしたとき、「商船三井戦時船史」の刊行を期待したこと。99年に米・国立図書館で米軍撮影の太平洋戦争の写真に出会い、空爆下をのた打ち回って避航する日本の輸送船、潜望鏡に映った被雷の瞬間など、断末魔の船の様相に接したとき、舵を取り、計器を睨んでいるであろう乗組員のことを想い胸が痛くなった。歴史的事実であっても、必死に回避する船をなぶり殺しするように襲う攻撃機への憎しみさえ覚えた。これらの体験が本書執筆の動機となった。と「まえがき」に書かれている。

そして、活躍らしい活躍もしないまま海没した戦艦大和や、海軍に関する本はたくさん出版されているが、輸送船として「不可欠の働きをした」商船や乗組員に触れた本は殆どない、と嘆いておられるのには同感であり、この大作を完成させた労苦に深甚の敬意を表するものである。

## 少年船員たちの死

この本には1隻ごとに戦没船員の職・氏名、年齢が記されている。それを見ていて、同世代の故か、10歳代の少年船員の戦死者が余りにも多いのが気になって教えてみた。286隻のうち、戦死船員50名以上の船が37隻あり、このうち33隻が1944年以降に沈められており、これらの船の戦死少年船員の割合は、35%前後が多い。286隻の中で船員の戦死者が最も多い135人の玉津丸(44年8月19日戦没)では、14歳~19歳の戦死者が52名、38%である。具体的には14歳7名、15歳9名、16歳9名、17歳9

名、18歳10名、19歳8名である。他の年代は20歳~29歳31名(20歳10名)、30歳~39歳30名、40歳~49歳19名、50歳以上3名である。20歳~30歳代は兵役に取られていて少ないのかも知れない。

44年12月7日、レイテ島救援に向かい、欄座揚陸を行った赤城山丸は、揚げ荷後空爆で乗組員58名と船砲隊69名全員が戦死した。この乗組員の年齢構成は10歳代40名、20歳代5名、30歳代7名、40歳代4名、50歳代2名で、約7割が10歳台であるが、13歳1名、14歳2名、15歳11名を含んでいる。

15歳~17歳といえば高校生の年代だが、戦争は中学生や高校生の年代を乗組員の半数近くも乗せなければ船を動かすことが出来ないほど切迫していたのであろう。

現代の少年たちは、赤い髪や携帯電話や、ワールドカップサッカーに熱中しているが、かつての戦争で同年代の船員がたくさん死んだことを、今問題になっている有事法制が、自分たちにどんな影響をもたらすかを、もっと真剣に考えてもらいたいと思うのである。(S)

## 戦没船員調査 = 岐阜県

本籍地	A	B	BC	C	合計
大垣市	3	2	6		11
岐阜市	18	10	16		44
多治見市	9	2	3		14
高山市	10	4	5		19
中津川市		1			1
安八郡	9		1		10
稲葉郡	8	3	5		16
揖斐郡	10	5	7		22
恵那郡	16	6	10		32
大野郡	6	1	4		11
海津郡	3	3	1		7
可児郡	6	4	4		14
加茂郡	10	9	12		31
郡上郡	13	9	9		31
土岐郡	14	10	15		39
羽島郡	5	2	4		11
不破郡	3	7	3		13
益田郡	2	1	2		5
武儀郡	15	5	11		31
本巣郡	4	5	3		12
山県郡	4	2	1		7
養老郡	7	1	5		13
吉城郡	8	3	9		20
合計	183	94	136	8	421

\* C船の資料不足につき市郡に集計せず。  
A = 陸軍徴用船、B = 海軍徴用船、BC = 陸軍配当船・海軍指定船、C = 船舶運営会

# 記録する会の運動継続を

「資料館を支えるグループの運営について」  
を発表した 杉本 勝君へ

戦没船を記録する会 理事 二宮 淳祐

<はじめに>

「戦没した船と海員の資料館」が船員ご遺族や平和を願っておられる多くの方々に利用され、館の維持や活動を支持される人々が増加していることは、些かでもその設立に係ったものの一人として、喜びに堪えない。しかも、小泉政権と自由民主党など政権与党が、国家総動員法ではないかといわれる、有事法制を成立させようともくろんでいるときだけに、その活用の意義は大きいものがある。

しかし、そうした時期であるにも拘らず、君は敢えて「資料館.....」の一文を発表した。その文章の内容について、「戦没船を記録する会」の一員として、私は黙って見過ごすことは出来ない。

<合意書の意味>

何故、この時期に君は「運営について」を発表したのだろうか。

私の憶測だが、本会のニュース「会報31号」に掲載されているように、本会の川島会長と、全日本海員組合井出本組合長が「合意書」に調印したことにあるのではないだろうか。

その結果、君の「資料館支持グループ」の中の活動について、とかくの干渉を受けたくない。平たく言えば「戦没船を記録する会」は資料館設立によって、「その役割を終わったのだから、俺たちの活動について余計な口をはさむな」ということではないだろうか。

もしそうだとしたら、それは大きな思い違いではなからうか。

当事者の君が一番よく知っていることだが、君が川島会長への一方的な通告で「資料館グループ」結成に走り、私にまで結成の趣意書や振替貯金の振込用紙を送ってきたように、広く本会会員に参加を働きかけた。

このことは会員からの問い合わせなどで、私たちに強い危機感を抱かせることになった。しかし一方、資料館設立は本会自ら係ったことであり、しかも、その設立を喜んでいる多くのご遺族、海員組合員その他の関係者のことを考えると、下手に「本会声明」などを出して、運動が分裂しているなどの印象を与え、資料館の活動や海上の平和運動への支持が薄れるようなこ

とがあってはならない。

それらを考えた結果として、井出本組合長が君の単独の申入れを受け入れたことは、本会を軽視、もしくは無視することに等しいとして申入れを行ったものであり、その結果、組合側も君を本会代表と見誤った事実誤認のミスを認め(君は敢えて誤認するように仕向けたのか知れないが)、資料館活動にも傷が付かず、本会への打撃も最小限に食い止めるために「合意書」が作られたものと思っている。

従つて君の行動(11月17日の本会理事会で私は、分裂行動であり、私は許すことは出来ないと言った)に対して、腹に据えかねているのは私たちの方であつて、君が本会の今後の役割などについて、云々する余地や権利はないのではなからうか。

むしろ君は、これまでの川島会長初め、本会理事会の冷静な行動に感謝してよいとさえ思う。

<資料館建設の経緯>

「戦没船を記録する会」設立の歴史から、改めて考えてみようではないか。

私の記憶では、「会」設立のアイデアを当時の船舶部員協会に持ち込んできたのは、今は体を壊して引退している中原君と君、そして現在資料館主任研究員上沢君であつたと思う。しかし、そのアイデアが生かされたのは、部員協会という40年近い運動を続けていた団体があり、その事務所の一角を借り、立上り資金を準備できたこと。部員協会の長い運動の実績から、多くの有志のお知恵を借り、船員社会に知名の方々、例えば川島会長、今は亡き浦田弁護士や船舶通信士労組の大内義夫さん、あるいは土井元海員組合長など海上労働運動、とりわけ海の平和を守る運動に理解の深い方々に、役員や会員として協力をいただいた。

そのことがまた、多くの会員に参加していただけたし、その支持と協力があつたからこそ、8年間にわたる団体の維持と、写真収集などの多くの成果を上げることが出来たといえるのではなからうか。

また、海員組合が3千万円の予算を組んで「資料館」設立に乗り出したのも、「戦没船を記録する会」の海の平和運動に対する適切な資料を収集している実績を評価したからに他ならない。

こうして振り返ってみると、「資料館」は如何に多くの先輩や仲間の、善意と協力によって出来上がったものであることか。そして、最も忘れてならないことは、戦争によって失われた先輩船員たちと、その遺族の強い平和への願いの上に成り立っているものであることだろう。

もとより団体の維持、運営には、いわゆる指導者

の的確な着想、積極的な活動が欠かせない。しかし一方で、会員や組合員である団体構成員や支持者の支持、協力なしには、いくら指導者がふんばっても、団体の発展も維持もままならないであろう。

<一方的通告という無礼>

かつての友人として、私は自分の思いを率直に語ろう。

君も、私も敗戦後の間もない時期から、海員組合を軸とした海上労働運動に携わり、また、1967年の船舶部員協会の創立以来、その運動に係ってきた。君はまた「戦没船を記録する会」の事務局長として、これまでの経験や知識を駆使して、東奔西走し(そのことを君は「運営について」の文中で語っているが)活動してきた。私はその功績を認めるのにやぶさかではない。

しかし、その君が、本会理事会において、提案に賛成を得られなかったことを理由に、多くの理事の理解を求めることを放棄して、また、君の活動を認め信頼されていた川島会長に、ただ一方的に通告しただけで、「資料館支持グループ」結成の行動に走った。その原因は一体何なのか。

私の憶測では、「記録する会」の運動という、先ゆきが見えない運動に疲れて、「資料館」の維持、運営という、範囲の限られた、君の知識や経験の十二分に生かされる、居心地のよい場所に座りたかったということではなかったのか。

それならそれで、君の行動を理由付ける十分な理由となることである。

もし、そうであるとするなら「運営について」の中で、本会の今後の役割についてなど、触れる必要はないのではないか。

君は文章の中で、本会はその規約の上からも、存在の意義がなくなったかのように言っている。しかし、また一方で、「記録する会」に留まって両団体の接点になりたかったともいう。

その矛盾は置くとしても、君が本会から去らざるを得なかったのは、理事会の多数が君の行動を「仲間を裏切る行為」として受け止めていたのを、君自身が認めたからであろう。

私にいわせれば、「功を焦るあまりに、自分を育ててくれた組織に、恩を仇で返す」結果になったといたい。

「運営について」のような、自己の行動を美化する弁明を行えば行うほど、人はその行動の中に、かえって、やましさを臭いをかぎとることになるものである。

<運動は終わっていない>

私は「戦没船を記録する会」の存在が、尚一層必要になっていることを確信する。

本会は、君や上沢君が去ったことによって、いくらかの打撃を受けて、多少その活動範囲が狭まったにしても、尚しっかりと運動を続けている。

如何なる運動であれ、団体行動では、仲間や支持者たちの理解や協力なしに、運動は広げられるものではない。もし人が、運動があたかも個人や少数のグループの、特別な能力や才能で、成し遂げられるような錯覚を抱くと、しばしば独善に陥り、運動の衰退を招く恐れがあるといえる。

今回の君の行動や、あたかも資料館の写真の殆どを一人で収集したかのように喧伝している上沢君の記事(赤旗日曜版・3月15日号)のことが、「他山の石」として私たちには大いに戒めとなった。

ましてや、有事立法が計られ、個人情報保護に名を借りて、情報管理さえ計られかねない昨今の政治情勢である。ささやかであっても、本会の海上の平和を守る闘いの一端を担う活動は、決してゆるがせにできないものである。

また今回の海員組合との「合意書」は、組合が「資料館」設立の唯一の相手である本会に、何の相談もなく「支持グループ」結成を認めた手落ちを、承認したが故に調印した。

従って今後も、資料館の維持、運営に万一手落ちがあれば、その都度発言することは、本会の義務となるものといえる。

これらの点から、私は、本会の運動はますます維持、発展させねばならないと確信している。

(全日本海員組合名誉組合員)

## 2002年平和のための 戦争展 in よこはま

期日 2002年8月9日(金)~11日(日)  
場所 かながわ県民センター(横浜駅西口)  
(9日18時から「トークの夕べ」-いま平和のために伝えたい-アフガニスタン・パキスタン・横浜-福寿祈久雄・糟谷幸美・吉岡逸夫



## 57年目の遺族訪問

新潟の元陸軍兵士・大木さんの努力実る

3月末に新潟県の新潟市からいただいた手紙は、陸軍兵士として乗船していて、昭和20年3月20日に中国・廣東沖で空襲により沈んだ船の、「船名」を調べて欲しいということであった。

同封された「手記」によると、この船団は輸送船3、護衛艦2の編成で、爆弾や武器兵隊を載せて3月17日早朝呉淞を出港したが、揚子江口で1隻が触雷座礁したため2隻船団で航行し、3月20日に廣東まで後2時間ほどのところで、空襲により爆発炎上して2隻とも沈没したようである。

この日の10時30分頃敵戦闘機が偵察に飛来し、それを日本の隼戦闘機が追撃したが、早さで太刀打ち出来ず見ていてくやしい思いをした。その後この船の船員で新潟市出身の、17歳くらいの氏名不祥のA君が兵隊の居住区に来て、「今、敵がきた。皆さん覚悟したほうがいい。後2時間くらいしたら、必ず敵の飛行機が来る」と言い、兵隊たちは「縁起でもないことを言うな」と笑っていた。このA君は夜になると同郷のよしみでよく遊びに来て、「この船は戦時急造形で、船内の仕切り壁(隔壁)がないから、魚雷1発で撃沈は間違いない」などと他人ごとのように話していた。この船には出港前に1週間かけて、急造爆薬や15糎榴弾等爆発物を船底一杯に積み込んだので、攻撃を受けたら大変だと思っていたが、誰もそれを口にするものはいなかった。

午後1時までの立哨を終えて、昼食を取ろうとしていたときに、左舷中央付近で船が割れるような爆発音がして機関が停止した。船が左に傾き大量の海水が滝のように居住区に流れ込んだ。機銃弾や爆弾の炸裂で負傷者も続出した。外に出ると上空には、空が暗くなるほど敵機が飛び交っていた。

天木さんはその時、火傷と打撲、爆弾の破片傷を負い、気を失いかけていたときに、船員が襟首を強くひっぱって、「ここに居れば必ず死ぬぞ、早く立って退船するんだ、船は今撃沈するぞ」といわれ、その人に従って行って、左舷のポートに乗ったが繫留ロープを切り離すことが出来ないのので、戦友と2人で船の棧橋の板(ハッチボード)に捉まって漂流後に護衛艦に救助された。(以上手記の要約)

この時の船名を知りたいということで調べたところ、戦時輸送船団史の記録から、前記日時に呉淞から香港に向かった万世丸(蝕雷座礁)、福星丸、平津丸の「光07」船団が、これらの条件に合致することが分かった。船団史等の記録によると平津丸(15

77トン・大阪商船)は陸軍部隊326名と隊貨2346梱の外、弾薬2944梱、ガソリン1100罐を搭載していた。13時頃戦爆(戦闘機爆撃機)連合52機の波状攻撃を受け、1・2番艙、船橋、炊事場が直撃され、弾薬、ガソリンに引火爆発し沈没した。そのため陸軍162、備砲隊6、警戒隊4、船員34名が戦死した。福星丸は同様の攻撃を受けて近くの陸岸に欄座、便乗者8名が戦死した。

その記録をコピーして送付したところ、折り返し「探していた船は平津丸に間違いない。については平津丸の戦死した船員の名簿を調査したい」というので、殉職船員顕彰会にお願いして船別戦没船員名簿の平津丸34名をお送りした。



天木さん(右)と兄の写真を持つ弟さん

そうしたら今度は、最後のお願いということで、新潟県の5名の平津丸戦没船員の出身地を知らせて欲しいということで、戦没船員名簿(戦没船員の碑建立会)から5名を抜き出し、この名簿は当時の本籍地が記載されているので、根気よく探さしかないとと思うなどと付記してお知らせした。

その結果4月末になって、当時本人の名前さえ聞いていなかったA君が、「山口慶治」さんであることがわかった。「お陰様で私が58年間尋ね回っていた友達のご遺族と巡り合うことが出来ました」とのお便りと写真をいただいた。現在、2歳年下の弟さんが新潟市に在住しており、ご遺族に当時の状況を詳しく語られたことであろう。

天木さんの探していたA君「山口慶治」は、昭和5年1月生まれであるから、多分、昭和19年3月に小学校高等科を終わって、2~3ヶ月の訓練の後、夏頃に初めて乗船し、その翌年3月、満15歳を過ぎたばかりで戦死したのである。なんととも惨い事であり、絶対に繰り返してならないことである。

## 知られざる漁船の戦い

「宮城県の徴傭漁船群」一新関昌利著

今回、「記録する会」の会員で、仙台育英高校の教諭をされている新関昌利氏の労作をご紹介します。

同氏は、ふるさとの「宮城県の空襲」をまとめるために、県下の空襲状況を調査する過程で、各漁港で戦時中に軍に徴傭された漁船員や漁船の話を書くまで、太平洋戦争で100トン前後の漁船までが徴傭された史実を、まるで知らなかったようだ。

そこで、その疑問解明に、生存する漁船員より聞き取りを行い、郷土の史実としてまとめようとされたが、「なぜ」漁船群までが、太平洋戦争で戦力になったかの究明に3年有余の努力を積み、その成果を本書の表題となった「知られざる漁船の戦い」とされた500頁余を、自費出版されたのである。

副題は「宮城県の徴傭漁船群」となっているが、本書は、民間船舶の徴傭とはを嚆矢に、遠く日中戦争当時よりの徴傭漁船に遡及し、開戦後の黒潮部隊(特設監視艇隊)の東方洋上の防衛や北方作戦、昭和19年末より20年の本土防衛作戦での活躍の経過を述べながら、その過程で宮城県下の漁船群の行動概要を、うまくまとめられている。

更に外国の民間船徴傭や、時には撃沈された特設監視艦の乗組員の米国での捕虜生活から、海軍予備員制度にまで言及され、読む人たちへの理解に一歩踏み込んでいる。

また本書は、宮城県下の漁船群が、特設監視艇として活躍した南方部隊や、南方石油積取り漁船群。漁労隊として、更に陸軍徴傭の関係部隊に言及している。

最後に、本土防衛で海軍に駆り出された特殊漁船や、海軍の本土防衛部隊である内戦部隊で、三陸の北方海域での米潜水艦2隻撃沈の戦果や、徴傭された捕鯨船の活躍にまで言及されるなど、本書には新関氏の宮城県下の漁船と、その乗組員に対する畏敬の心が、読む人たちにひしひしと感じさせられる。と同時に無謀な戦争への憤りを独く感じさせる。

正岡 勝直

## おたより

本紙前号掲載の「岩代丸遭難・漂流記録」の原資料を提供していただいた赤塚節子さんに、会報31号をお送りしたところ、次のお便り(一部略)と切手をたくさんいただきました。有難うございました。

### 前文略

この度は父のことでたくさんのお骨折りをいただき、有難うございました。『写真があったら...』と気軽に送った資料が、こんな展開を見せるとは思ってもみなかったもので、とても驚いています。

お送りいただいた資料を読みながら、未っ子の私に優しく父の戦後がやっと終わったような、もう一度甘えてみたくなるような深い思いにかられました。父とよく話していた叔父たちが生きていたらもっと何かがわかったかもしれないと思いますが、どこかに眠っているであろうたくさんの命の声と戦争の事実がこうして掘り起こされ、確かめられていくことこそ、人を人として尊ぶ大切な作業なのだと実感しました。心より感謝申し上げます。

私の住む江東区には東京大空襲の資料館があります。所属する合唱団で8月に平和へのメッセージを込めて『いのち輝けコンサート』を行います。5年前につくった詩のグループは、亡くなった父親へのレクイエムを自身のテーマとして、詩を書き続ける仲間がいます。私もいろんな仲間たち・いろんな運動に学びながら、いつか父や母の軌跡をきちんと書いてみたいと願っています。

夏には京都へ行く用事があるので、神戸の資料館にも是非立ち寄りたいたいと考えています。記録する会の一層充実した活動を心から願っています。

2002平和のための埼玉の

戦争展

7/25～29

AM10:30～PM6:00

最終日はPM3:30まで

浦和駅西口前コルソ7階

入場無料

# 便宜置籍船の無法性暴露

## 「T A J I M A」事件にひそむ問題点

パナマ籍V L C Cタンカー「T A J I M A」の事件は、発生から1ヶ月以上過ぎた5月15日、海上保安庁が2名の被疑者を仮拘束して下船させたため、本船は同日、姫路港を出港した。

この事件は、日本人2航士が航行中の4月7日に行方不明になり、フィリピン人乗組員2人が犯行を自供したが、公海上の事件の管轄権は船籍国にあり、日本には刑事裁判権がないとして、被疑者の逮捕・拘留も・上陸・移送することも出来ず、管轄権を持つパナマ政府が積極的に動かないため、揚げ荷役終了後も本船は動きが取れないでいた。

もともとT A J I M Aは郵船の海外子会社の所有船で、共栄タンカーが船舶管理をしており、船長ら日本人船員6名と、フィリピン人船員18名が乗り組んでいた。日本の船会社が完全に支配し、日本の荷主の積荷を日本の港に運ぶという、日本商船隊の一翼である。その船内で起きた日本人船員を結果的に殺害した事件を、日本の港に入港しても、日本の法律でどうにも処置することが出来ないという、全く異常な事態が目前で起きたのである。

便宜置籍船はコスト削減のために、海運先進国が作り出した制度で、税金も安全設備も船員費も、全てを安上がりで済ますための制度である。そのため便宜置籍船は規則、技術、社会保障の上で無法地帯であり、規則、税制、社会保障の3重のダンピングが認められている制度と言われており、便宜置籍船による重大海難事故も多発している。

現在、日本商船隊の日本籍船はわずか117隻で、後の支配外国船も外国用船も、その殆どが便宜置籍船である。I T Fの資料では、パナマに登録された船舶の40%、リベリア登録船の7%が日本船主の支配船である。日本の海運はこうした多数の無法状態に置かれた便宜置籍船に依存しているのである。

T A J I M Aの事件に対して現場船員から、「船内はこの話で持ちきりだ。本船でも2機士と操機手の掴みあいの喧嘩があった。いつ何所の船で起きてもおかしくない事件だ」と報告されている。

T A J I M Aは出港したけれども、便宜置籍船の問題は何も解決していない。この事件は、便宜置籍船の無法性、不法性を世間にアピールする良いチャンスだったが、被疑者の早期退船と、本船の出港が目的化されたため、便宜置籍船の暗部をえぐりだす絶好のチャンスが失われたことは残念である。(K)

## 第8年度収支報告書

(2001年4月～2002年3月)

基本会計		
科目	入会金	繰越残高
前年度繰越	150,000	
入会金		
合計	150,000	150,000

一般会計		
科目	収入	支出
前年度繰越	554,494	
会費	78,000	
賛助会費	24,000	
寄付金	21,000	
事業収入	31,675	
雑収入	6,233	
通信費		88,810
会議費		44,550
印刷費		38,300
事業費		73,748
交通費		
事務所費		240,000
雑費		45,426
繰越金		184,568
合計	715,402	715,402

繰越金内訳		
科目	基本会計	一般会計
現金		15,690
振替貯金		12,525
銀行預金	150,000	30,079
同		126,274
合計	150,000	184,568

### 【収支報告補足】

総会でも報告しましたが、例年は2月から3月に総会案内の会報と会費納入のお願いを送付し、3月末までに相当数の会費が納入されました。今年では会報発送が3月末になり、会費納入も殆どありませんでした。しかし4月に入って多数の会員が会費を納入して下さったので、5月末の繰越金は約54万円で、昨年5月末の繰越金約56万円に比べ、約2万円だけ少なくなっています。なお、会計監査報告の本紙掲載は省略しました。

### 【編集後記】

会報第32号の発行が予定より少し遅れましたが、年間4回発行を目指し努力しています。また、既に決まっている埼玉や横浜の「平和のための戦争展」参加と共に、本会独自の「パネル展」をぜひ実現したいと努力しているところです。ご協力下さい。

「有事法制」が国会審議に上り、全国各地で反対運動が盛り上がっています。東京では明治公園に4万人が集まった「STOP!有事法制5・24大集会」に続いて、代々木公園に6万人を集めて「STOP!有事法制6・16大集会」が開かれ、記録する会からもこれら集会に有志が参加しました。日本政府の高官が核兵器保有は可能と言ったり、米大統領が先制攻撃、核攻撃を公言してはばからない時だけに、有事法制を廃案に追い込む国民的な大運動が一層大事になっています。(篠原)